【土木史研究　第11号　1991年6月　自由投稿論文】

横浜南部の土木遺構
― 昇龍橋について ―

正会員　関東学院大学　増渕 文男

A Historical Study on SYOURYUU-BASI
in the south of YOKOHAMA

by Fumio Masubuchi

概　　要

日本の歴史に「横浜」が登場するのは江戸時代の幕末期で、港を中心とした横浜北部地域が中心であり、これが今日の横浜のイメージとして広く定着している。しかし南部地域にはこれより古い遺構がみられるようで、本研究は横浜南部の土木遺構を調べ、石橋の一橋「昇龍橋」について報告するものである。

昇龍橋の架設位置は横浜市南部にある栄区の狐川上流部で、この河川には土木遺構として石橋の他に溜池、堰、及びずい道などがある。しかし、これらの遺構は付近の住民一部が知るだけで、一般的にはあまり知られていない。石橋の構造形式といえば九州の石橋があげられるが、昇龍橋はそれと類似性が少なく、何処の石工が建造したものか不明である。石材は当地の鎌倉産「今泉石」を使用しており、軽快な感じと独特な趣をもつ石橋である。架設年代は親柱に大正四年の刻印があり、かすかに読み取れるが、親柱と石橋本体とは石材が異なるので、まだ明確にはなっていない。石橋の建造には高度な技術が必要であるが、何故この地にその技術が展開されたかなど追究すべき点が多い。

この周辺には江戸時代を中心に土木遺構が多く存在し、高度の技術力と文化、それを支える経済力を温存してきたが、近年になり衰退し開発事業の影響が心配される地域である。

【キーワード：大正以前、横浜、石橋 】

1．はじめに

横浜市南部に流れる狐川には江戸時代に造られた「瀬上池」などの土木遺構がある事は知られていた。昭和40年代に急速な宅地開発が始まり「瀬上池」は公園として保全されたが、その他の土木遺構はその役割を終え、消滅の恐れが出てきた。そこで狐川流域の遺構調査を行い、表－1のような結果を得た。

表－1．狐川流域の土木遺構一覧表

種　別	名　称 目　的	構　造 施工年代
溜　池	瀬上池．他 農業用水確保	土堰堤と溜井ずい道 江戸末期
堰	横堰(通称) 農業用水利用	堰と導水ずい道 江戸時代中期
ずい道	無名(私有地) 河道変更	掘抜き 江戸時代中期
石　橋	昇龍橋経堂橋 鎌倉道．参道	石造アーチ橋 明治～大正初期

このうち、横浜において重要な意味をもつ石橋で、完全な形で残っている「昇龍橋」について述べる。

昇龍橋は白山神社の参道にあり、狐川を渡るために造られた。名前の由来は小寺[1]によれば、「狐川流域にいとなまれる水田に、水豊かならんことを願望して」のことらしい。この石橋以

写真－1．昇龍橋現況写真（1990.3）

外にも、第２次大戦後の宅地造成工事により埋没したものや地名として残っており、この地域には石橋群があったようだ。

２．架設位置

架設位置は横浜市栄区長倉町を流れる狛川源流部で、主要地方道の原宿六浦線（通称は環状４号線）という道路の脇道にある。

昇龍橋は狛川源流部の、谷地底部にあり、草木に覆われて周囲からは見えにくい。

狛川は境川水系柏尾川の左支川であり、横浜市栄区を流れる二級河川で、流路延長は９Kmである。このうち特に上流部（栄区上郷町、長倉町）では蛇行が続く渓流となり、遺構はここに集中している。

３．構造形式

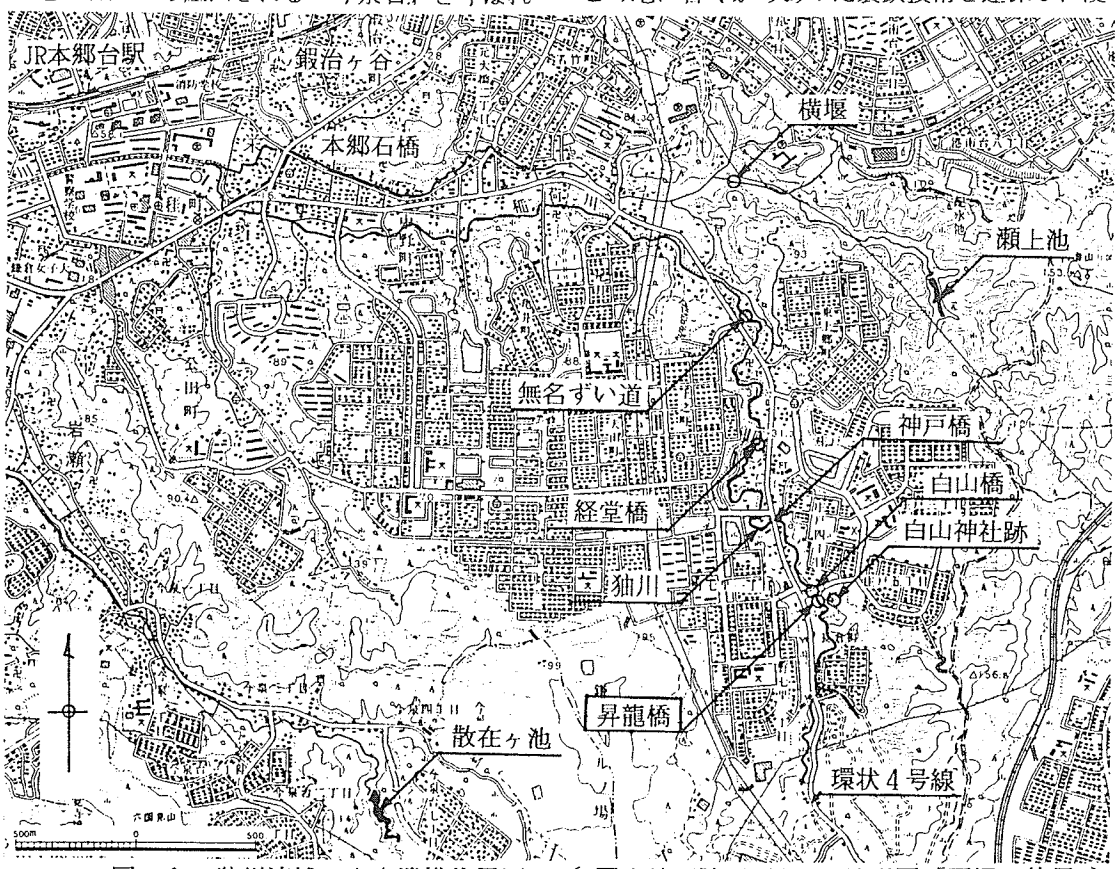
石橋本体の石材は散在ケ池（現在の鎌倉湖）付近の谷戸から産出される『今泉石』と呼ばれる砂岩系のものを使用。高欄部は近年の補修工事において、羽目石消滅部に現存の材質に近い、山梨県塩山産の白御影石を使用している。

表－２．昇龍橋構造概要

構造規模	石造アーチ橋（人道橋）		
橋　長	５．４７ｍ	支間長	３．９０ｍ
幅　員	１．９０ｍ	有効福員	１．３８ｍ
アーチ高さ	１．９５ｍ	ライズ比	０．５０
使用材料	石橋本体：鎌倉産今泉石 高欄　　：白御影石		

石造アーチ橋の建設では高度な技術が必要であり、この技術は九州から伝えられたと考えるのが一般的である[2)]。しかし、昇龍橋の意匠においては九州のものとは一致するところが少なく、建設にあたっては不明な部分が多い石橋である。設計者、施工者は判明できていない。

この地の歴史から推察すると、鎌倉時代に奈良より工匠集団が鎌倉に呼び寄せられた。そしてこの地に古くからあった製鉄技術と連係し、優



図－１．狛川流域の土木遺構位置図　（国土地理院 1:25000 地形図「戸塚」使用）

秀な石材加工具が整い、石工の技術が急速に進歩した。　これは鎌倉の石造物を見ると明らかで、鎌倉時代前期では加工し易い地元の凝灰岩であったものが、後期では安山岩（伊豆真鶴石）などの硬いものを使用している。近世になると散在ケ池付近の谷戸から産出される、火に強い今泉石を使って、炭焼き用の釜戸を造っていた。

(1)石橋の意匠について

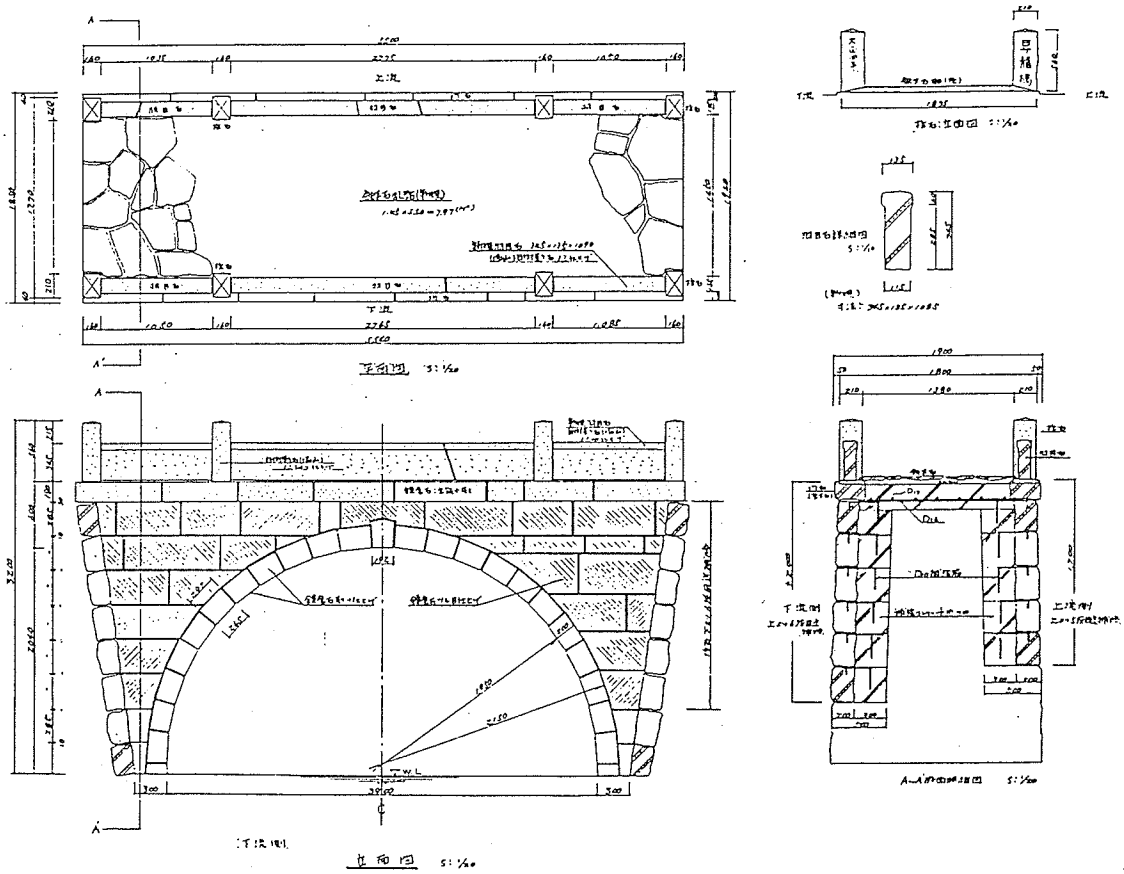
拱環（アーチリング）はほぼ半円形をなし、輪石（リングストーン）の寸法は背面幅 295mm、腹面幅 265mm、厚さ 200mmで幅と厚さの比がほぼ３：２となっている。九州地方の石橋ではその比が１：１か又は２：３の割合であり、厚い拱環が石橋特有な重量感と頑強さを感じさせる。しかし、昇龍橋は横長の断面の輪石で構成されており、薄い拱環にみえる。また輪石に対して充腹部の切石が大きく、通常の石橋とは趣が異なり、親近感のある洗練された石橋である。

(2)五角形の要石

要石（キーストーン）の形状が五角形をしており、充腹部を含めた石造りのアーチ構造物では珍しく、国内の石橋でもあまり見られない。また要石の上部の切石が三角形に彫ってあり、要石の頭部と一体化させ、施工の緻密さが伺われる。下流にある経堂橋も同形をしているので、二橋は同一者が造ったものと思われる。

４．沿　　革

建造年については定かでない。親柱には大正４年９月の刻印がかすかに見える。本体と親柱（高欄を含む）の石材が異なるため、この石橋は大正４年以前に架設されていた事がわかる。また下流の経堂橋は『皇国地誌』[3]（この付近の調査は明治11年頃実施）に木橋と記載されており、同時期に建造したと考えれば、明治11年以後となり、建造年は明治中期から大正初期の



図－２．昇龍橋構造図　　（作成：横浜市道路局 1990.5）

間となる。昇龍橋付近の住民の話しによると、親柱と高欄については、大正天皇即位記念として鳥居と一緒に造られたものらしい。この石橋の沿革は資料が無く推論によるものであるが、この付近の地名並びに遺跡から、7～9世紀頃に製鉄技術が伝わり、それを祭る信仰の象徴として「白山神社」があった[4, 5]。そしてこの神社が14世紀にこの場所に移され、それと同時に橋が造られたと考えられるが、この橋が記述された古文書は発見されていない。

表－3．昇龍橋に関する年表

正中元年 (1342年)	白山神社を鍛治ヶ谷からこの地の光明谷山巌山に遷宮．初代昇龍橋架設
大正 4年 (1915年)	昇龍橋の親柱が設置された． この以前に昇龍橋が石造りとなる．
大正 5年 (1916年)	神社入口に石造鳥居が建てられた．
大正12年 (1923年)	関東大震災の折に社地と社殿が崩壊 社殿を参道の入口付近へ移設．
昭和49年 (1974年)	この地域の宅地造成工事により、白山神社を東上郷町へ移転．昇龍橋は参道橋としての使命が終了．
昭和61年 (1986年)	横浜市道路局の調査で存在確認． 最古で、初めての石橋が出現した．
昭和62年 (1987年)	横浜市の橋梁台帳に人道橋として記帳される．
平成 2年 (1990年)	解体補修工事。

5．評　価

(1)優れた選定による石橋

狝川の川幅と水面高さが石橋に適した寸法であり、橋梁形式の選定に優れたものがある。自然な河川形状と石橋の構造が一致し、これが現在まで存在している要因でもある。

(2)関東以北の希有な石造アーチ橋

石造アーチ橋の建設技術は15～17世紀に海外より伝わり、明治維新まで九州内にとどまり、特定の石工たちの秘伝となっていた。その技術が何故この地に伝来されたか追究すべき点が多い。日本の石橋の歴史において、関東以北で現存する明治以前のものは20橋以下といわれており、小規模ではあるが参道に架かる実用橋として、昇龍橋は貴重な石橋であるといえる。

(3)横浜最古の石橋群

狝川流域のこの周辺には、石橋が多くあったようで、地名に残されたもの（本郷石橋）もあるが、昭和40年頃までは3橋、現在では2橋が残る現況である。そして下流側にある経堂橋は半壊の状態で、現在は使用されていない。

横浜市内には石橋は数橋あるが、殆どが昭和初期に造られたもので、大正4年以前の石橋はこの地域に限定され、とくに昇龍橋は建造当時の姿をとどめた貴重な石橋である。

横浜では開港期の木橋から直ちに鉄橋の時代に移ったと考えられてきたが、石橋の存在が確認されたことにより、この歴史観に再考を促すことになろう。

6．おわりに

この地にたたら（製鉄）の技術が7～8世紀頃に伝わり、鎌倉時代の遷都とともに西方の新しい技術が導入され、石材加工技術も進歩した。多くの新しい技術の影響を受けて、この地も栄えたが、幕府滅亡と同時にその勢力も衰えた。しかし、幾つかの技術が生き残り、以後は、京都や江戸から孤立した「地方」で、何故か優れた技術力が蓄積されていたようである。今日において、狝川流域のこの歴史の追究があまり無いのは、今後の開発事業において充分留意される必要がある。

昇龍橋の解体補修工事関係の資料については横浜市道路局栄土木事務所の末廣良和氏よりご協力を得たことを付記する。

引用した参考文献

1)小寺　篤:『よこはまの橋・人・風土』,秋田書房,P131-132,1983.
2)太田静六:『眼鏡橋－日本と西洋の石橋－』,理工図書,P-30,1980.
3)『皇国地誌』, 相模国鎌倉郡上野村 村史,P-30,明治11年.
4)本郷郷土史研究会:『本郷のお寺とお宮』,戸塚区役所本郷支部,P-126,昭58年.
5)『 大日本地誌大系・新編相模国風土記稿五 』,村里部,P-14,明治11.